



Title	2002年度UAクラス『作文』授業での取り組みに関する報告
Author(s)	小南, 淳子
Citation	大阪外国語大学留学生日本語教育センター授業研究. 2004, 2, p. 35-48
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/8753
rights	本文データはCiNiiから複製したものである
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

2002年度UAクラス 『作文』授業での取り組みに関する報告

小南 淳子

【要旨】

日本語上級者を対象とする作文の授業では、受講生の文章向上への意欲より、内容的理解への意欲が上まわりがちである。ある程度の表現能力を有しており、またそのことへの自負もある若い年齢層の学部留学生上級（以下UA）クラスにおいて、彼らの興味のままに指導者が流されていては、極端に言うならばとりとめのない雑談にさえなってしまう。語学が本来総合的な知識を基盤とすることを重視し、やがてレベルアップに結実するのだと思うこともできようが、1年間という期間限定の『作文』の授業の中で、受講生に文章能力そのものへの向上意欲を持たせようすることは重要であると考える。すでに上級レベルに到達しているUAクラスの学生達が、そこにとどまらずさらに高い能力を目指すための作文のテーマ選びの試行錯誤を、授業報告として提出したい。

1. 前提としての問題意識

私はこれまで日本語上級者を対象とする作文の授業を長く担当させてもらってきた。日本語・日本文化研修留学生（以下J）コース、研究留学生上級（以下RA）コースの学生との授業を多く経験し、UAコースも複数年度担当した。授業は、その時々のテーマにもよるが、活発な質疑応答もあり、おおむね順調に進んだ。

しかし、一見順調な中に実は問題点が多くある。それはとりわけUAコースの作文の授業において意識せずにいられなかった。すなわち①テーマやそれに派生する内容に興味が集中し、それに終始してしまうこと、②学生自身に文章能力についてのある程度の自負心があり、それ以上に向上していこうとする意欲に欠けることである。そうした雰囲気の中で文章の訂正すべき点の指摘等をおこなっても、チェックはするものの身についてはいかないのである。

①については、内容に興味を持つこと自体に問題があるわけではない。むしろ、内容的に深い文章になるように、テーマについてのディスカッションをおこなったりもしているわけであるが、それに終始してしまうことを問題としている。また身近なテーマについての洞察が、個人差はあるが総じて浅い。授業は活発な発言はあるが、連想ゲームのように質問事項が次々に派生していく。

例えばUA連絡ノートの私自身の記載を振り返ると、「ワールドカップのことから（相手チームに呪いをかける）black magicの話が出て、次々と出る質問に任せているとキリがないので、何とかその中から文化・教養につながる話にもっていこうとつとめています。すべてが教養といってしまえばそれまでなのですが、あまりにとりとめのない雑談に終わってしまうことのないようにしたいです。」（6月13日）とある。実は他の先生方の記載にもUA学生の同様な傾向を推測できるものが多数あり、好奇心旺盛な彼らのエネルギーに翻弄されているのは私だけではないかも知れないと密かに安堵したりしていた。

②については、ごく近期の課題にはほとんど同じ種類の間違いが重ねて出現することから気

付かされた点である。訂正箇所の少ない、良く書けた作文中の1, 2箇所の訂正、それを身につけることができないで、次の作文でも、また次でも同様のミスをするということ、それは本人の意識・意欲と大きくかかわっていると考えられる。

具体的には、例えば常体の文章と敬体の文章を混ぜて書かないようにならうという基本的なルールについての浸透が極めて遅いということ、また同様にカギかっこの向きや特定の文字の書き癖など、気を付ければ一度で理解可能なことが数度にわたって繰り返される。注意すればすぐに気付くし、授業に向かう態度等に問題はないので、当初はこちらがとまどうところであった。

UAコースの学生は、所謂受験生であり、JやRAの学生達のように専門の勉強をまだ始めていないこともあって、この文章をもっとうまく要約したいとか、自分の主張をもつて的確に表現したいという気持ちに目覚めていない時期であるかも知れない。彼らが今必要と意識するのは、学内での成績を取るためのレポート作成や筆記試験のための作文能力らしいが、それはすでに獲得していると自己判断している様子がうかがえる。日系の学生も多く、実際に作文の力はかなり高いレベルではある。したがって、向上意欲を持たせることについては、相当意識的におこなわなければ達成しにくいのが現状である。

これらを解決すべき点として、2002年度UA『作文』授業に取り組んだ。受講生の個々の状況を見極めながら、何よりも、文章そのものの向上への意欲を持たせることを第一義に考え、それを意識した講義をし、テーマを選び、ディスカッションをおこない、レポート作成をおこなつてみた。

2. 授業の概要

- UA必須科目として2002年度はUA 9名に学部留学生初級（以下UE）（理系）1名を加えた10名が受講した。
- 木曜日Ⅰ限・Ⅱ限連続で、2002年4月18日から2003年3月6日まで、実質62コマ（1コマ90分）の授業をおこなった。試験及び試験後の解説に当てたコマ数は除いて数えている。
- この授業の目指すところは、

入学試験を視野に入れて、小論文を書くために

- ①原稿用紙を正しく使えるようになること
- ②600～800字程度の小論文を、適切な段落構成をもつて書けるようになること

進学後の活動を視野に入れて レポート作成に対応できるように

- ①Microsoft Wordの操作をマスターすること
- ②正しく要約がされること
- ③ある程度の長さをもった文章の章立てができるようになること

次にあげるのは具体的な授業計画である。

3. 授業計画

テーマ	コマ数	ねらい
(1)導入	5	<ul style="list-style-type: none"> ■ 授業で学ぶことを明確にし、意欲を持たせる。 ■ 原稿用紙の使い方を身につける。
(2)生活作文を書く	12(18)	<ul style="list-style-type: none"> ■ 身近なテーマについてディスカッションをし、自由に作文を書く。 ■ 600～800字程度の生活作文を書き、制限時間を守りながら自分の主張を述べるために慣れる。 ■ 字数に適した文章の組み立てや段落構成について考える。
(3)小論文を書く	13(22)	<ul style="list-style-type: none"> ■ 様々なテーマについてディスカッションをし、小論文を書く。 ■ 小論文に適した、論理的な表現力を身につける。 ■ 短い文章（新聞記事や短編など）を引用したり、要約する力を身につける。また、資料を使えるようになる。 ■ 一般論に終わらない、オリジナリティーのある自己主張ができるようになる。
(4)PC実習	3(5)	<ul style="list-style-type: none"> ■ Microsoft Wordの操作をマスターし、レポート作成の場面で、自由に使いこなせるようになる。
(5)レポート作成	29(15)	<ul style="list-style-type: none"> ■ 個々人が目指す専門分野に関連するテーマを選びレポートを作成する。 ■ 学術的な文章を読み、端的にまとめることが出来るようになる。 ■ 学部進学後に必要な、筆記試験・レポート作成のためのアカデミックな文章表現を学ぶ。

※ コマ数は実際におこなった数字で記している。（ ）内の数字は当初の授業計画であったが、学習の進行、受講生の意欲等により、変更をおこなった。

※ (2) 生活作文を書くで採り上げたテーマは「私と日本」「私の家族」「ゴールデンウィーク」「高山旅行」「心に残った本」などである。

※ (3) 小論文を書くで採り上げたテーマは「子どもと遊び」「私の尊敬する人」「理想の生き方」「メール・ラブについて」「『くもの糸』を読んで」「国際化社会について」「新聞記事を読んで」「ニュースを見て」などである。

※ 夏期休暇中の課題は、宮沢賢治・芥川龍之介のいずれかを選んで読み、作品について論じるものと1つ、印象に残ったニュースを取り上げて論じるものと1つ（いずれも600～800字程度）とした。

4. 授業報告

以上の全体計画のもとに、授業を進めた。I・II限連続の授業だったので、たとえば(1)導入の段階にいれている原稿用紙の使い方についての学習は、連続しておこなったわけではなく、(2) 生活作文を書く段階にも、期間をあけながら1コマずつしていくというように柔軟にお

になっている。細かな原稿用紙の使い方についてのルールは、一度に何もかも教えられると、おそらく煩雑に感じるであろうから、何度かに分けておこなった。(4) PC実習についても同様で、実際に使っていく中でさらに便利な操作を覚えたいという意欲が出てくるのを待って、また1コマ実習に当てるというふうであった。

また、書く機会を増やすようにするために、ほとんど毎回、600字程度のホームワークを課した。提出状況はおおむね良かった。600~800字という字数は、1コマの中でまとめやすい量であり、かつ、きちんとした段落構成を必要とする量もある。また、試験等で出される小論文の傾向を考えても妥当であると考えている。

4月から夏休みの課題までは原稿用紙を用い、9月以降はPC小教室でMicrosoft Wordによる作文作成をおこなった。(3) 小論文を書く段階までは、2コマ連続の授業であることを考慮し、1コマを作文作成に当て、もう1コマを添削やディスカッションに当てるようにした。授業の性格上、個別指導の場面も多くあるが、共通するミスとして出てきがちなものについては、とりあげて全員で読み、添削作業を共有させるようにした。

学生の意欲の目安としたのは、①作文作成中に表現等についての積極的な質問が出るかどうか、②添削のあった点についての改善が早い時期に実現するかどうかなどである。一年間の授業の流れから、以下、ピックアップして報告している。

【4月18日第I限の授業】

(1)導入(5コマ)のうち本時は1コマ目 最初の授業であるので、オリエンテーションをおこなう。	
学習内容・板書など	指導上の留意点
私自身の自己紹介をする (10分)	質問がないか確認をする
試験の実施方法・平常点・評価の仕方について説明をする (5分)	実際にいくつかの言葉を調べさせて、学生の持っている電子辞書の内容と比較させる
国語辞典・参考文献注 ¹ の紹介をする (15分)	上級レベルは目に見える上達が確認しにくい段階であることをあらかじめ明確にし、そこからのステップが語学学習の醍醐味であることを強調して意欲を持たせようとした
本授業の目標とするところを極力具体的に説明する (40分)	一方的にならないように学生に意見を求める自己紹介に少し飽きていたようだったので考慮した
学生の名前の確認 (10分)	最後に読み返す予定であることを知らせる
短い作文を書かせる (15分) テーマ「日本に来て2週間」現在の心境 400字以内	原稿用紙の使い方は未習のため、自由にさせた。

《期待される効果》 学生達自身がそれぞれのレベルについて自覚することができ、現状にとどまらずに向上しようとする意欲を持つ。

提出課題の多い授業であるので、提出物が滞ることがないように自覚を持ってもらう。

《授業の自己評価》自分たちの意識に近いものがあったようで、納得している様子が見られた。

作文のテーマは、はじめ気持ちが入らないようだったが1年後に読み返してみようと言うと、積極的に取り組む姿勢が見られた。

【5月16日第Ⅰ限の授業】

(1)導入(5コマ)のうち本時は5コマ目 原稿用紙の使い方のルールを学ぶ(2)…主に漢数字の表記について注2	
学習内容・板書など	指導上の留意点
原稿用紙の使い方について学んだ前回の授業をふりかえる。 (15分) 口頭での説明の後、板書をして確認する。 ・題名と名前の書き方 ・句読点、括弧の記述について ・拗音、促音の記述について	原稿用紙に例文を書かせて、作業をしながら確認させるようにする。 前回の授業の繰り返しに終わらないように行頭に記号が来るときの例外など、少しずつ内容を付加した。
原稿用紙に縦書きで漢数字を書くときの原則について学ぶ。 (30分) ・西暦 ・世紀 ・年号 ・月日 ・年齢 ・人口 ・金額 etc.	漢数字の特徴について考えさせる。 受講生に思いつくままにあげさせ、指導しやすい順に並べて板書する。 単位がはっきりしていることの利点を生かした表記・数字の羅列の方が読みやすい場合があることに気付かせる。 それぞれの表記についてどちらが適しているかを話し合わせながら確認し、定着を図る。
例文を原稿用紙に書ぐ。 (20分)	例文は読み上げて、書き取らせた。数字については繰り返して読み上げるようにし、書きにくいものについては思い出させるように声かけをおこなった。
個人指導で添削をおこなう。 (20分)	ホームワークの課題「心に残った本」を知らせ、待っている時間に考えたり、書き始めたりするようにした。

《期待される効果》原稿用紙の基本的なルールを身につけ、読みやすい原稿を書くことができるようになる。漢数字の表記について興味を持つ。

《授業の自己評価》比較的スムーズに基本のルールを身につけることができた。

しかし、授業は単調に進み、機械的に練習をして終わった感がある。

本時の導入時に原稿用紙が近代文学の中で果たしてきた役割について言及し、親しみを持たせたり、意欲を喚起しようと試みたが、学生の反応はあまりなかった。意図を実現させるためには、原稿用紙に書かれた作家の文章を写真などで見せ、原稿用紙の歴史性、文化性に気付かせるようにするなど、もう一工夫すべきであったと反省している。

【6月13日第Ⅱ限・20日第Ⅰ限の授業】

(3)小論文を書く(13コマ)のうち本時は1・2コマ目

ディスカッションの中で問題点や自身の興味に気付き、主張のある文章にまとめる。

小論文に適した構成について理解する。

学習内容・板書など	指導上の留意点
<p>《13日》</p> <p>子どもの遊びについて、ディスカッションをする。 (20分)</p> <p>各自の思い出した遊びを板書する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・おにごっこ ・ままごと ・工作やプラモデル ・空想 ・物語づくり etc. <p>現代の子ども達の遊びについて考える。 小論文作成に当たっての留意点について学ぶ。 (10分)</p>	<p>できるだけ自由に話し合させた。 指導者に向かっての発言になりがちなので、互いの意見交換が成立するように、配慮した。</p> <p>批判ばかりにならないように、軌道修正をする。 1コマ目であることを考慮して、約束事を「適切な題名を付けること」、「常体の文で書くこと」、「一般論に終わらず、自己主張すること」の3点にとどめた。</p> <p>作成中の発言や質問は自由にさせる。</p>
<p>小論文の作成 (60分)</p> <p>《20日》</p> <p>13日提出の小論文について、他の受講生の文章を互いに読み合い、ディスカッションと添削を行う。 (65分)</p>	<p>全般的な講評を行って本時の導入とし、その後、全体の問題として考えることができそうな3人の文章のコピーを配付して、全員に考えさせる。</p> <p>具体例の用い方について、効果的な例を取り上げ、考えさせる。</p> <p>小論文にはまだ慣れていないので、テーマの絞り込みの必要性があることを少し述べるとどめた。</p> <p>待ち時間ができないように、次時の資料を配付した。</p>
<p>個人指導で添削をおこなう。 (25分)</p>	

《期待される効果》 小論文と生活作文の違いについて気付く。ディスカッションの中で、様々な捉え方があることに気づき、自分自身の考え方を自覚できる。

《授業の自己評価》 作文作成中の活発な質問を期待したが殆どなく、全員が黙々と作業をしていた。学生同士の会話も多くは漢字の確認程度であった。(会話を禁じていたわけでは決してなく、むしろ、「相談してもよい」「質問は積極的に」等の声かけを行っていた。)

社会性のあるテーマに移行した「小論文」ということで意識したためか、「内容は伴っていないが形としては評論文」のような文章が続出した。次はその1例である。

現在の子供達

「子供」というと、まず浮かんでくるのが悪坊主などいたずらっ子といった感じである。しかし、ほとんどの子がそうであるとは限らない。毎日外で遊んでいる子もいれば、部屋の中に閉じこもっている子もいる。現在では後者にあたる子が増えている。これは技術の発展による影響だと思う。子供達はコンピューターやテレビゲームなどにはまり、外でおごっこやじんとりなどして遊ぶ子はほとんどみられなくなっている。時代に沿って生きていくのは良いとは思うが、それを極端にすることによって、子どもの純粋さがうすれてくる。なぜならばコンピューターやテレビゲームなどで部屋に閉じこもっている子達の多くは気分変動や一過性の妄想が激しくなりつつあるからだ。したがって子供達は自然のまま育っていくことが一番いいと私は思う。そうすることによっていわゆる“できの悪い子の増加を防ぐことが可能になるのではないか。

生活作文で学んだ段落分け等も活かされていなかったので、その点を変えるだけでも伝わりやすくなる事を知らせ、思い出させるようにした。

【7月4日第Ⅱ限の授業】

芥川龍之介「くもの糸」^{注3}を全員で読む。多く刊行されているが、インパクトの強い挿し絵のものを選んだ。順に朗読をさせたが、その段階から読み方に感情がこもるように工夫する様子が見られた。全員で読む教材として適切であったと考える。通常は作文作成の前にディスカッションを行っていたが、このたびは読後すぐに書かせてみた。

続く7月11日の第Ⅰ限では、作文の添削をするのではなく、カンダタについての自由な討論を行った。いち度、書くために各自の中で思考が整理されていたためか、ようやく意図するディスカッションが成立した。「カンダタは悪い」「でもかわいそう」「自業自得」「いつか反省したら極楽へ行ける」「罪と罰の比重」「自分だったら…」「お釁迦様の気持ちがわからない」「自分と他者のあり方」等々の意見が活発に交わされた。できるだけ板書することで、すべてを肯定しながら進めた。講評はせずに、それぞれにコメントを付して返却した。ディスカッション等で思考を深めてから書くというパターンにこだわる必要はないと考えさせられた。

これまでの生活作文では消極的であったり戸惑い気味であったのに、内容も文章もおどろくほど豊かになった学生がいて、教材選びの必要性が再認識された。

【7月18日第Ⅱ限・7月25日第Ⅱ限の授業】

(4) PC実習(3コマ)のうち本時は1・2コマ目

Microsoft Word2000の基本的な操作を身につける。

学習内容・板書など	指導上の留意点
《18日》 モニターを見ながら、基本的操作について学ぶ。 (20分) 例文を入力する。 (10分)	モニターを使って、よく使う機能から順に、いろいろな操作をさせる。 あらかじめプリントを用意した。
作成した例文を使って、基本的操作を実習する。 (60分)	《教材資料①》 プリントを雑形として、いろいろな操作を実習させる。 《教材資料②》

<ul style="list-style-type: none"> ・センタリング 右寄せ 左寄せ ・字体とポイントを変える ・アンダーラインを引く ・文字の拡大縮小 斜字体 太字 ・罫線を引く ・テキストボックスの使い方 ・均等割付 ・行間を変える ・インデントで行頭を動かす etc. 	<p>次時のためにファイルに入れさせる。</p>
<p>〈25日〉</p> <p>マスターした操作を確認する。 (10分)</p> <p>モニターを見ながらWord2000で表作成の機能について学習する。 (10分)</p> <p>前時の例文をファイルから開いて、参加者名簿の表を作成する。 (25分)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「表の挿入」のアイコンから2列3行の表を作成する ・列幅の変更 ・左右罫線の移動 ・行幅の変更 ・表に文字を入力する <p>表作成のその他の機能や操作を学ぶ。 (25分)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・セルの結合 分割 ・文字揃え 行の高さ揃え 行の幅揃え ・罫線の微妙な動かし方 etc <p>自由にいろいろな操作をしながら質疑応答をする。 (20分)</p>	<p>これ以後の作文はPCで行うことを知らせる。</p> <p>モニターを活用する。</p> <p>カーソルの位置を確認させる。</p> <p>「3×2表」の表示を確認させる。</p> <p>文字配列を整える操作を知らせる。</p> <p>罫線ツールバーのアイコンを順に使わせる。</p> <p>Altキーの使い方の効果をモニターで見せる。</p>

〈期待される効果〉大学進学後のレポートや論文作成に対応できるように、Word2000の基本的操作を身につけることができる。

〈授業の自己評価〉UE8の理系学生を除いては全員がほぼ同じレベルなので、そろって進めることができた。UE学生については、充分に慣れているようだったが、自己流のため、ほかの方法もあることを知ってほしかったが、本人に任せる形となった。

Eメール等で入力は充分できるし、母国語でのワープロソフトは全員よく使っていたので、予定していたよりもとても早く授業を進めることができた。

予定にこだわらず、質問に応じて応用的な操作も教えたが、充分理解できたようだった。

教材資料①

平成14年7月18日
UAクラスの皆さんへ
(自分の名前を書きましょう)

Word講習会のお知らせ

暑い毎日ですが、皆様いかがお過ごしですか。
UA作文のクラスでは、この度 Word2000 の講習会を行うことになりました。
みんなでがんばってマスターしましょう。

日程は下記の通りです。時間厳守でお願いいたします。

記
期間 平成14年7月18日・25日
場所 留学生日本語教育センター2階パソコン小教室
集合時間 午前10時50分
持ち物 筆記用具 国語辞典など
以上

参加者名簿

教材資料②

【9月26日以降の授業】(5) レポート作成

パソコン実習の反応がとてもよかったです、教材の選択によって文章表現能力の向上が期待できることを考えて、当初、1月から計画していたレポート作成を繰り上げて行うことになりました。

継続する内容となるので、各自の興味が持続するテーマということで、それぞれの進学後の専攻テーマに沿ったレポート作成を行うことにした。専攻は決めていても、内容にはまだほとんど入っていないということで共通していたので、そのまま進学後に役立つようには概説書・入門書や資料を読み、要約することを含め、「概論」に相当する科目のレポートという設定で始めた。^{注4}

章立て、目次作りには充分に時間をかけた。少し単調な作業であったが、「これができたら半分できたのと同じ」というはげましの効果があった。

「はじめに」の部分には、作成とH・Wと添削、完成までに3コマ当てたが、H・Wで3通りの文章を作ってきた学生や、レポート完成に近づくたびに手直しを加えた学生もあり、総じて、彼らの意欲があるべき方向に向かい始めたと実感した。また漢数字の原則なども、このレポート作成の段階ではきわめて意欲的に身につけようとする様子が見えた。

I限・II限続きの授業なので、I限はH・Wの小論文の添削指導に当て、II限を主としてレポート作成に当てるようにした。(3) 小論文を書く、(5) レポート作成の段階で、徹底して行った声かけは、①一般論を自分の意見だと思い込まないこと ②根拠を明確にするよう意識すること ③文献等の資料を用いる場合においては筆者の意見や資料から読み取れることと、自分の意見を区別できるように書くのが常識であること などであった。

また発展として、自分の主張についての「例外」を探してみることを促した。自分の主張がその例外をもクリアできるかどうかを考えたり、むしろ時にはその「例外」を重視したほうが面白い展開になることにも気づくように声をかけた。

全体で行う添削やディスカッションの場でそれらを繰り返し伝えていくことで、少しづつ個性のある文章が出てくるようになった。

5. まとめ

当初、(5)のレポート作成は、冬期休暇前に小論文のテーマの中から適当なものを選び、休暇中に資料収集をおこなったうえで1月中旬から学年末に向けての作業にして、学年末試験に代えるというのが予定であった。しかし、ここで述べてきたような経緯で長い期間にわたって10数ページのレポート作成にかかることになった。この中で、学生達は内容の充実への意欲に伴う形で、文章表現能力の向上に対しても目に見て意欲的になった。

資料については、何も情報を与えられないで直接向き合うのが本来であると考えるが、いろんな意味で「模擬」的要素の多い作文の授業においては、ある程度の情報を与え、動機付けをする方が活発な学習活動につながることが多い。例えば、授業の少し残った時間に新美南吉の作品を読んだことがあったが、学生達にとっては芥川龍之介ほどには知らないこともあってか、その反応はとても鈍かった。しかし、新美南吉のきちんとした佇まいの写真を見せ、20歳過ぎから病気になったこと、命を削るように作品を書き続けて30歳で他界したことに加えて、その生涯を表すように、命をテーマにした作品が多いことなどを伝えたところ、ほかの作品ももっと読みたいという声が続出した。「でんでんむしのかなしみ」^{注5}を、試験の資料として用いた時も、大人に人気のあることを知らせたためか、とても充実した解答内容であった。

短い読み物であり、訴える力の強いもの、ということで、作文のきっかけとするための教材として童話は非常に使いやすい。だが、語学の学習途上だから子供向きの文章を教材にされていると思うことは学生のプライドを損ね、意欲減退にもつながるだろう。私は、作品は童話であるが、内容的に深いので大人の読者が多いということを、必ず強調して伝えるようにしている。(そういう作品を選ぶことがもちろん前提である。)さらに2点教材資料③、④として、たいへん反応の良かった教材を後に載せている。

9月以降のレポート作成において、文章構成への意欲が増したことには次のような要素があった。①学部進学後も人より一歩先を行きたいという気持ちが旺盛なので、専門分野の概説的なものを読むことに対して非常に積極的であったこと、②PCを使うことによって、漢字を調べるなどの作業で考えを中断されることなく、文章作成を進めていくことができ、興味がそこに向かったこと、③ローマ字で指先が入力を起こない、それが目の前にひらがなとして一度出現し、漢字に変換されるというPC画面上のプロセスは、おそらく彼らにとって極めて自然な流れであるらしいこと。(私などは、既に最初から漢字が頭に浮かんでいるのに、指先はローマ字入力の運動を強いられ、次にひらがなが見え、変換キーでいくつかの違う漢字を見せられた後で、ようやく最初に思い描いていた漢字にたどり着くというのがどうも好きではなく、自分自身の思考形態が変わっていくのではないかと思うような違和感が、ペンを使わなくなつて久しいのに未だにあるが)学生に聞いてみても、むしろこの方がスムーズだという返答が返ってきた。

日本語学習初級者がひらがなを習得し、次にカタカナ、漢字と進んでいくとき、目に見える上達の軌跡があるが、上級者の場合それは既に停滞しているかのように見えててしまう。決してそうではないのだが、UAクラスの学生自身にそういう思いは強いようだ。

こういう時期にはむしろ、語学を総合的な知識の集成と考え、個々の興味に任せてゆっくり教養を深めていればいいのではないかと考えた時期もあった。しかし、「作文」という名の授業でのこうした考えは、そこから先へ一歩進めるための指導ができないことへの言い訳でもある。「作文」の授業においては、文章表現能力を間接的にではなく、直接的にのばすための努力を忘

れてはいけないということを、反省も込めて再確認した。

それから、その日の授業の終わりに、「今日はよく分かったね！」「おもしろかったね！」「次はこんな事もしたいね！」というような声かけが実は意外に意欲につながる効果がある。それは学生の表情を見ていると明らかである。ある意味暗示にかけているようなものであり、姑息なようだが成果の確認の声かけは、内容の工夫に加えて普遍的に必要ではないかと考える。

注1 国語辞典は『新明解 国語辞典』三省堂を薦めている。

注2 漢字の表記については保坂弘司 講談社学術文庫『レポート・小論文・卒論の書き方』講談社(1978)の内容を参考している。

注3 講談社青い鳥文庫版を使用した。

注4 この、当初のテーマをそのまま継続して論文作成をおこなった。『2002年度Uクラス論文』参照。

注5 大日本図書『新美南吉童話選集』より

(こみなみ あつこ 本センター非常勤講師)

母さんの歌

「くすのきがわ」は、バスの終点です。
道のほとりに、大きなくすのきが立っていました。
終バスが着いて、まばらな人かけが路地に消える
と、くすのきのあたりは、ひつそります。
細い月の出た夜でした。くすのきの頭が、空の中
でゆれていました。
「おや、聞こえるぞ。」
くすのきは、足をひいて、小さな歌声を聞いたのです。
「母さんが歌ってる。ややしい、声だなあ。」
くすのきはうつむきました。
「……幸せな、親子だな。」
手をつなぐいた親子が、歌しながら、くすのきのそ
ばを通って立ちました。
「こじか、こじか、母さんの歌は……。」
くすのきはまた、あの夜のことを思い出したのです。
「かわいそうな、どうでもかわいそうな、親子だつ
だよ。」
夜空が真っ赤にそまって、広島の町が、焼けてい



た後のことです。
「さうひと、遠い、昔のことのようだ……。こやじ
や、なんだから、昨日のことのようだ……。」
くすのきは、町が焼けてこじかを見ました。人の
死んでいくのも、見ました。
「おそろしきはくだんだつた。あんなのは初めて、
見たんだ。こここの道を、みんな、にげていつたな。
足もとへられて、おや、助けない人もいた……。」



す。ややしい子守歌です。
ぼうやをだいて歌っているのは、お下りのかみの
女学生でした。
母さんの名を、よび続けるぼうやを、ほつておけ
なかつたのです。
「かあ、ちやん。」
「はいよ。」
「か、あ、ちや……。」
声が、だんだん、弱っていきました。
まいがのぼうやは、顔じゆうひどいやけど、目
も見えないようでした。
「母ちゃん。」
女学生は、ぼうやを、しつかりとだしました。女
学生の心は、母さんの心になりました。母さんのむ
ねに顔をうめて、ぼうやはもう、なんにも言えない
のです。母さんは、くすのきによりかかつて、ぼう
やをだいて、子守歌を歌い続けました。
「いい歌! 歌つておやり! すうと、すうと、
声の繰くかぎり、歌つておやり。小さな、ややし
い母ちゃん!」

暑い夏の日でしたが、くすのきの周りには、ひ
やりしたかけがあつたのです。
日がくれると、広げたまだしげつた葉が、夜つ
ゆの落ちるのをやめました。
太いみぎによつかつて、ねむる人もありました。
土の上に転がつて、ねむつた人もありました。
くすのきのにおいが、かすかに、ただよつており
ました。
「……みんな、やけどをしていた。に行こうにも、
もう、動きがなかつたんだ。ものと言うかも、ない
ようだつたな。」
町を焼く火が、くすのきの頭を、赤々と照らして
いました。
「だいじょうぶだ。こんな町外れまで、火事は広が
つてしまわない。安心して、おやすみ。」
くすのきは、足もとでねむつている人たちを、自
分が、守つてあげなければならない、というよう
な、気持でした。
「おや、聞こえる。」

くすのきはむねがつまりました。でも、うれしか
つたのです。
「ぼうや、よかつたな。母さんに、だがれて……い
いな。」
言いながらくすのきは、体をうるわせていました。
「かわいそうな、小さな親子……。」
やがて、朝がきて、日の光が、小さな親子のほお
を、金色に照らしました。
「まるで、生きてるようだつたら、一人じゃ——。」
子守歌を聞きながら、ぼうやは、死んだのです。
ぼうやはだいたまま、くすのきによりかつたまま、
小さな母ちゃんも死んでいました。
「……目をつむると、今でも、あの歌が、聞こえて
くるようだ。」
くすのきのひとりごとが、夜空を流れていきました。

ポプラ社刊『おはなし名作絵本29』より
この大野允子の作品は、定期試験の資料としたものが、あとで、どうしても問題文を持って帰りたいと、殆どの学生が申し出��いた。戦争は、テーマとしては扱いがむずかしいと感じていたが、この教材は、その後の授業での自然発生的な、すばらしいディスカッションのきっかけとなつたものである。

